

郷土の歴史講演会

令和元年6月30日

郷土の偉人

大澤龍次郎翁との思い出

公益財団法人 忍郷友会評議員 江利川 毅
(行田市立東小・長中卒)

自己紹介

- 埼玉県行田市生まれ（昭和22年）
- 行田市立東小学校、長野中学校、埼玉県立熊谷高校
- 小さいころから天文学者になるのが夢
- 高2の時、オリンピック後の不況、友人の家の倒産→社会に直接役立つ道を選ぼう（志望を理系から文系へ）
- 東大法学部→公害問題に取り組みたい→厚生省（公害部）
- 公害問題、年金、医療保険の改正、介護保険制度の創設
- 総理官邸勤務（①（課長級）中曽根内閣、竹下内閣、
②（局長級）橋本内閣、小渕内閣、森内閣）
- 中央省庁再編で新設された内閣府の大臣官房長、内閣府事務次官（～H18年7月、小泉総理大臣）→民間シンクタンクに勤務
- 再度、国家公務員（一般職）に採用。厚生労働事務次官（H19年8月～H21年7月、舛添大臣）→埼玉医科大学特任教授
- 再々度の国家公務員（特別職）、人事院総裁（H21年11月～H24年4月、民主党内閣）
- 公益財団法人医療科学研究所理事長（H24年5月～）
- 埼玉医科大学特任教授（H25年4月～）
- 前埼玉県立大学理事長（H26年4月～30年3月）

「大澤龍次郎翁伝」 (大澤俊吉著) を読んで

冒頭で、郷土の歴史等に触れている。後の世代が郷土の歴史や偉人を知ることが大切なこと

- 万葉集に、埼玉（さきたま）が出てくる
- 埼玉古墳群
- 忍城の歴史
 - 成田親泰（ちかやす）
 - 上杉謙信、石田三成
 - 松平家忠（いえただ）
 - 阿部豊後守忠秋（ただあき）（8代、80年）
 - 松平下総守、5代続いて、明治へ・→忍郷友会松平忠昌会長
- 清善寺（成田時代に建立）
 - 成田、阿部、松平の家臣等の墓地（千数百の無縁仏）
 - 大澤龍次郎翁の父新兵衛は、その供養を希求
- 明治維新、官軍に帰順。戦いを避けられた。
 - 羽生陣屋の隊長 丹羽部（しとみ）が割腹して誠意を示す

大澤龍次郎翁について

出典：大澤龍次郎翁伝（大澤俊吉著）

- 明治20年（1887年）生まれ。父（新兵衛）は呉服商の番頭
- 明治25年、6歳、進修館小学校入学
- 明治29年、10歳、忍高等小学校入学、→優秀な成績で卒業
- 明治33年、14歳、綿布商安田源三商店に小僧奉公
その後、父上京、学生下宿を営む。大石観法総禅寺住職と知る
- 明治37年、18歳、中番頭に抜擢される
琵琶名取、柔道初段、中国語を学習・・・人脈を広げる
- 明治39年、20歳、兜町中澤安麓商店に入店（株式界に転身）
- 明治40年～42年、兵役
- 明治42年、小泉策太郎（三申）と知り合う。山川とめと結婚
- 明治43年、三申先生が山栗商店の総支配人に。その秘書となる
- 明治45年、父新兵衛死去（65歳）
- 大正3年、福田政之助の看板を借りて営業（実質独立）
- 大正6年、公債株式現物問屋大澤商会を創業（独立）
- 大正8年、大蔵大臣より東京株式取引仲買人認可。大澤龍次郎商店開業（33歳）

(続き)

- 大正9年、株式暴落、大正11年、東京株式取引所火災。関東大震災
- 大正14年、父13年忌に無縁塔を清善寺に建立
忍城址碑建立（諏訪神社内）
- 昭和4年、時警塔寄付（文集「時警塔」）
- 昭和6年、東京株式取引所商議員に選任される
父21年忌に無縁塚を清善寺に建立
- 昭和7年、新兵衛地蔵を無縁塚頂上に奉安
- 昭和9年、「行田音頭」を発表。経済的支援をされる
- 昭和13年、店舗四階ビル新築
- 昭和15年、忍出身学生懇親倶楽部設立
- 昭和17年、忍郷友会表彰（会長林頼三郎、名誉会長松平忠寿）
- 昭和19年、大澤証券株式会社設立、社長
- 昭和20年、空襲により四谷本宅焼失
- 昭和32年、紺綬褒章
- 昭和33年、行田市名誉市民に推薦される
「愛のチャイム」を寄贈（文集「愛のチャイム」）
- 昭和49年（1974年）87歳で永眠。墓所は清善寺

浄財寄付（たくさんあって書き切れない）

- 明治40年、行田小にイーグル鉛筆500本寄付（5円）（21歳）
- 明治43年、行田小に雨傘250本、進修館小学校に雨傘250本
- 大正11年、忍町尋常高等小学校の建築に500円寄付
- 大正13年、同校へ、机36脚寄付
- 大正14年、父13年忌に無縁塔を清善寺に建立
忍城址碑建立（諏訪神社境内）
- 昭和4年、忍町分会へ550円寄付
時警塔寄付（鉄骨火の見櫓、サイレン）
- 昭和6年、父21年忌に無縁塚を清善寺に建立
- 昭和7年、新兵衛地蔵を無縁塚頂上に奉安（清善寺）
- この間、戦後も含め、教育、厚生、福祉、消防、警察、神社、史跡保存等に、多額の寄付・貢献
- 昭和30年、行田土木工事費へ2万円寄付
- 昭和33年、「愛のチャイム」の寄贈
- 行田市、埼玉県だけではなく、国や他県にも多額の寄付。
市及び県からの表彰十余件、国からの表彰七件
昭和31年、紺綬褒章

影響を受けた人

- 父 新兵衛
信心深く、律義、厳しい躰
父への孝養心→無縁塔、無縁塚、新兵衛地蔵尊
母（6歳で死別）に、字を教わり、本を読む
⇒礼を正し、分を弁え、懸命に励む人間に
 - 小泉策太郎
龍次郎を見出す（自分の手足となり、信頼できる人）
事業についての師
至誠の交わり
 - 大石観法老師（父の関係の縁）
「新兵衛地蔵尊」を命名した人
無縁塚の建立時、大石老師により盛大な供養を行う
心の師
- 報恩感謝に徹した人生観

「大澤龍次郎翁伝」を読んだ感想

- 幼いころ（姉妹が幼くして死亡、実質一人っ子）
父は呉服商にほぼ住み込み状態（封建色の残る社会の中で生活）、
丁稚のように仕込まれる
→我慢強い、骨惜しみしない、一生懸命頑張る
小学校の成績も優秀
- 14歳で、将来の修業のため東京の木綿商に丁稚小僧に入る。（東京を選んだのは、父の先見の明）
真面目な仕事ぶり→信頼される→18歳で中番頭に抜擢される→習い
事をする、多くの人を知る
（中国語、習字、琵琶、柔道）
- 20歳で兜町中澤安麓商店の店員に（証券業界に転身）。兜町で活躍
体が丈夫、頭脳明晰、惜しまぬ努力、誠実
- ⇒このような姿勢が、関係者の信頼につながり、先々、自分の会社
を設立することにつながる
社員からの信頼は厚く、社員の仕事に対する姿勢も良い

(続き)

- 恩師の「子どもたちが鉛筆を買えない」の言葉に、鉛筆500本を寄付。当時の鉛筆は外国製（21歳）

校長先生の生徒への言葉「二十歳過ぎの、そう有り余る金を持っているわけではないだろうに、困っている人にあげてくださいと買ってくれる気持ちに、心から感謝せずにはられない。困っている人を援助したいという立派なお手本となる貴重な鉛筆だから、その心を心にして大切に用いて、大澤龍次郎さんのような、社会のためになる立派な人になってください」（抜粋）

- 報恩感謝に徹した人生観

一度恩になったことは生涯忘れず、いつかその恩に報いたいという一念に燃え、常に報恩感謝の生活に徹する（簡単にできることではない。私にはそこまでできない）

縁ある人に誠実な交誼を結び、情義に徹したからこそ、幸いと成功をもたらした（天は自ら助くる者を助く）

- だからこそ、震災、戦争、株の暴落等の中で、証券会社を堅実に経営できた

(続き)

- 大正6年に店を持つ。社員は5人
大正8年には50から60人の社員
- 社員を大事にした

関東大震災で店は焼けたが、金庫は残り、お金が燃えずに残った→社員に分配

行田からお見舞いのお米10俵。これも社員に分ける
店員の教育（学校に通わせ、書道を勧めた）
社員の奥さん、子どもさんも大事にした

- お客を大事にした
顧客第一主義、親切第一、
温情あふれる風格ある店
- 当時の大澤龍次郎氏
男ぶりは良く、情はあり、意気と義に徹し、
気性強いキリツとした態度、負けず嫌い、激しい血潮
- 厳しい環境の中で、的確な事業運営
昭和6年には東京株式取引所商議員に選任される

大澤龍次郎翁の素晴らしい点

- 事業を成功させたただけでもずばらしい
成功を支えたもの
誠実、誠心誠意、一生懸命、親孝行
親切（人にやさしい）、約束を守る
自分にやれることを精いっぱいやる
 - 初めての寄付（20歳ころ：多分それほど所得はない）
勉強する若者への熱い心、恩師への報恩
 - 従業員への思いやり・熱い心
関東大震災後の焼けずに残ったお金を従業員と分け合う
 - 人間関係を大事に、お客を大事に、地域社会との関係も大事に
 - 故郷を大事に
- 単なる優しさだけでなく、それを支える意志力、行動力
←幼いころの経験（＝父親の背中、母から受けたもの）
学校での学び、仕事を通じての学び、事業成功への意欲

(参考) 澁澤榮一翁

- 新一万円札

深谷生まれ。「日本近代化の父」と謳われる。

- 「論語と算盤」 (澁澤榮一翁の講演の集大成)

実業界がなるべく力を張るように希望する。これが完全でなければ国の富は成さぬ。その富をなす根源は仁義道德。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することはできない。

- 利と義

孔孟の訓えは「義利合一」である。

参考：疏食(そし)を飯(く)らい水を飲み、肱(ひじ)を曲げて之を枕とす。楽しみ亦た其の中(うち)に在り。不義にして富み且つかつ貴(とうと)きは、我に於いて浮雲(ふうん)の如し「論語」

- 人道なるものは一に忠恕に存するものであるから、いずれもその職務に忠実にして、かつ仁愛の念に富まねばならぬ。

(参考：儒教の五常 = 仁義礼智信)

大澤龍次郎翁との思い出

- 「愛のチャイム」の寄贈（72歳と行田市立東小学校5年）
「愛のチャイム」の文集
中央小→東小→北小→・・・の順で
5年生の部の冒頭は中央小の人の詩
自分の作文は東小の冒頭に
大澤龍次郎さんの名前を知った最初のお機会
父が、「証券会社を立ち上げ、成功して、行田市の様々なことにたくさんの寄付をしている人」と話してくれた
- 附（時警塔の文集より）
「大澤さんは数え切れないほど郷里の為忍町の為に萬金をを
しまし尽くしてくださっている。然も大澤さんの平常のくらし
についてはかねてから質素と聞いて居たが、それが良く分
かって涙ぐましい程の尊敬を感じた。質素にして出来たお金を
いろいろな公益の為につくしてくれる其の心が尊いのだと思
う」（高二 矢澤律治）

助け合い作文コンクール

「広辞苑」と担任の先生の言葉

- 東小6年のとき
助け合い作文コンクールで埼玉県知事賞を受賞
大澤龍次郎さんからお祝いに「広辞苑」を贈られる
父に、「折角の辞典だから、担任の先生に記念の言葉を書いて
いただいたらどうか」と言われる。
- 担任の白子先生から贈られた言葉
広い地球の中で
長い歴史の中で
君という人間はただ独り
自分を大切に
自分を生かして
- この言葉は、自分に対して、自分の存在とは何か、自分は何のため
にあるのかを、考えさせてくれた
頑張らねばと、自分の一生を支えてくれた言葉である

大澤龍次郎翁との出会い

- お祝いのお礼を述べに、父に連れられて、東京へ『大澤証券』を訪ねる

「お昼に何を食いたいか」と聞かれる
外で食事した経験がなく、返答に困る
促されて「かつ丼」と言ったら

「洋食が好きなんだね」と言われて、帝国ホテルのレストランに連れて行ってもらった。

ライト設計の有名な建物（愛知県の明治村に一部保存。関東大震災にもほとんど無傷だった。私の勤務した総理官邸はライト風建築と言われている、明治村の写真を見るととても似ている）

レストランの壁画が洋風のきれいな絵で、すごく印象的だった。
別世界に来た感じ。

- 杖を使っていたが、きちっとしたお爺ちゃんといった感じだった。
写真では、端正な凜々しい感じだが、とても優しい感じだった

大澤龍次郎翁との手紙のやり取り

- 父から勧められて、広辞苑のお礼、帝国ホテルのレストランでの食事のお礼、何かの機会に近況報告など、手紙を出した
- その都度、丁寧な手紙が届く
子どもであっても一人の人間として対応
きれいな字、丁寧な言葉遣い
書き出しの時候の挨拶も工夫されている
例えば、冒頭に俳句を書いて時候の挨拶
封書の裏には「メ」ではなく「緘」と書かれていた
- 偉い人に手紙を書くのは負担感があって、長中時代に止めてしまった。昭和49年、87歳までご存命だったので、東大入学、厚生省入省の報告ができたのに・・・
- 後年、「忘年の交わり」「忘形の交わり」という言葉を知る
中国の漢の時代、大学者50歳と、20歳の交わりを、世人が「忘年の交わり」とよんだ。
「忘形の交わり」は、地位身分を離れての交わり。

清善寺の新兵衛地蔵尊

- 清善寺の入り口に大澤龍次郎さんから寄付を受けた旨の石柱が建っている
- 無縁塔があり、無縁塚があって、その塚の上に新兵衛地蔵尊が置かれている。私は、何を祀った無縁塚か知らなかった
- 「大澤龍次郎翁伝」を読んで、龍次郎翁の父親が、忍城に仕えた武士たちの墓が無縁仏になっていたのも、それを祀ってあげたいと常々思っていて、その父の気持ちに沿った行為であったことを知った。
- その塚の上の地蔵尊に「新兵衛」という父親の名と同じ名前を付けたのは、父親と親交のあった大石観法老師。龍次郎氏自身が父親の名前をつけたいと思っていたのではない。（このことは誤解されているかもしれない）
- 新兵衛地蔵尊の体内には、新兵衛がふとしたことで入手し、常に拝んでいた、青銅の地蔵尊が置かれている

結び

- 二つの世界大戦、大きな震災・戦災があった中で、株式業界という浮沈の激しい世界で、誠実に事業に取り組みました。
- お客や社員を大事にする、地域社会や故郷を大事にする。これは、言うは易く行うは難し。
- 実際、小さな寄付でもなかなかできない。生活が苦しいときは、自分優先で考えがちである。震災、戦災の傷跡が残っている中で、各方面への多額の寄付を行われたことには、心底から、尊敬の念がわいてくる。
- その人となりの基本は幼少期に作られたのだと思う。
- そういう意味で、幼少期の家庭や学校の役割・影響は大きい。
- 新たな一万円札の絵柄に渋澤榮一翁が選ばれた。子供たちが、故郷の先人として、大澤龍次郎氏や渋澤榮一氏を学ぶことも意味があるのではないかと思う。
- 「郷学」という言葉がある。市町村の様々な活動の中で、郷土の先人を学ぶ機会を考えてほしい。